
日本文化の過去・現在・未来

写本文化としての日本近世

— 公開ワークショップ「写本の山は招くよ」報告 —

勝 又 基*

1. はじめに

筆者にとって年来の研究的な興味の一つは、米国 UC バークレー校に所蔵される旧三井文庫写本約 3,500 点の調査を完遂してデータベースを公開すること、そしてそれをもとに、江戸の写本文化について問い直しをすることである。そのために組織した「写本文化としての日本近世」プロジェクトはすでに 7 年目に入り、現在受けている科学研究費も最終年度にさしかかっている。2022 年 1 月 10 日には、その一里塚として公開ワークショップ「写本の山は招くよ」を開催した。

本稿ではプロジェクトの概要を紹介するとともに、ワークショップの報告を行い、今後の課題と見直しについて述べたい。

2. 旧三井文庫と「写本文化としての日本近世」プロジェクト

UC バークレー校 C.V. スター東アジア図書館蔵旧三井文庫本は、1950 年に同校が三井家から購入したものである。この文庫は 1980 年代から調査・公開がなされて来た。版本については 1990 年刊の岡雅彦らによる冊子体目録『加州大学バークレー校所蔵三井文庫旧蔵江戸版本書目』（ゆまに書房刊）があり、写本については 1984 年に、長谷川強・渡辺守邦・伊井春樹・日野龍夫による紀要論文「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」¹⁾ が世に出ている。この調査に基づいて、写本目録編者の一人である長谷川強によって貴重書の翻刻刊行もなされた。写本の怪異仮名草子として異色の存在である『霊怪艸（あやしぐさ）』²⁾ や、江戸後期の怪異説話集として著名な『耳袋』³⁾ が、旧三井文庫本を底本として翻刻されたのである。くわえて近年は、銅版画や古地図のデータベースも生まれた、とのことである⁴⁾。

このような先行研究がありながら、なおもこの文庫が筆者を惹きつけたのは、UC バークレー校が購入後間もなく、この文庫を版本と写本とに選り分けたという歴史による。筆者が初めて同文庫を訪問したのは 2014 年 10 月のことである。折しも、江戸の写本文化が脚光を浴びつつあった。中野三敏『和本のすすめ』⁵⁾ によって、江戸の書物文化の中心は、むしろ写本だったのではないか、という見直しが始まっていたのである。写本ばかりが 3,000 点あ

* 日本文化学科 教授

まりも集まるこの文庫をまとめて精査すれば、江戸の写本文化の豊かさを窺うことができるのではないかと考えたのである。

幸いにも、同館日本コレクション司書のマルラ俊江氏からは調査のサポートをお許しいただいた。しかし調査を遂行するためには資金が必要である。ただこれも幸いなことに、2015年度三菱財団人文科学助成金（140万円）、2016年度明星大学重点支援研究（180万円）、2017-2021年度科学研究費（基盤B海外学術）（1,651万円）と、これまで多くの援助に預かった。本2021年度は5年間の科学研究費の最終年度にあたる。

3. 現地調査

2020年春から現在まで続くコロナ禍は、海外学術交流を軸とする本プロジェクトには大きな影響を与えて来た。見通しは決して明るくは無いものの、幸いこれまでのところその影響はある程度抑制できている、と言って良いだろう。というのは、写本の現地調査をコロナ前に一通り済ませてしまったからである。

本プロジェクトは、2016年冬から2019年夏までの間にグループで7回渡航し、計40日にわたる現地調査を行い、旧三井文庫だけでなく新規収蔵写本も加えた約3,500点の現物調査を終えた。3,500点を40日で、というのは荒技だが、図書館のサポートとデジタルの活用によるところが大きい。本プロジェクトは館からデジタル画像をメモ的に撮る許可を頂けた。そのため現地調査にあたっては、現物を見なければ分からないことの確認に集中し、序跋や識語の詳細な検討などといった時間のかかる作業は、日本へ持ち帰ることができたのである。

4. 口頭発表のアウトプット

調査の一方で、書物に関する国際シンポジウムをこれまで3度開催した。2016年1月には三菱の予算で「写本がつなぐ日本と世界」を開催した。副題を「古典籍と目録・研究の国際化」と題した通り、海外の司書、研究者を招いて古典籍の国際化について話していただいた。2017年1月には明星大学の予算で「世界の写本、日本の写本」を開催した。ここでは、日本古典籍、漢籍、西洋古典籍における写本の役割について情報交換した。2018年1月には科学研究費の支援によって「写本がひらく江戸へのトビラ」を開催し、江戸文化における写本の役割について議論した。

加えて、科研期間中の2018年9月6日には、UCバークレー校を開催校として行われたAJLS（Association for Japanese Literary Studies、アメリカ日本文学会）の年次学会において、“Sparkling Manuscripts, Sparkling Evidence: The Role of Manuscripts in the Edo Period（きらめく写本、きらめく証拠：江戸時代における写本の役割）”と題するパネル発表を行った。パネリストは、勝又と、現地調査に何度も同行して下さっている慶應義塾大学斯道文庫の佐々木孝浩氏、そしてUCバークレー校で江戸文学を講じるジョナサン・ズウィッカー氏の3名。ディスカッサントはブランダイス大学のマシュー・フレリー氏にお願いした。勝又は『凶刀伝』（整理番号280）、佐々木氏は『清少納言枕双帯拔書』（整理番号1640）と、共に旧三井文庫の写本を用いて、それぞれに江戸の写本文化の持つ側面を明らかにした。

また、科研最終年度の2021年には、コンテストへの応募もした。NCC JAPAN (The North American Coordinating Council on Japanese Library Resources、北米日本研究資料調整協議会)主催のComprehensive Digitization and Discoverability Program Award Program (包括的かつ発見の可能なプログラム賞、とでも訳したら良いか)という募集があったので、“Connecting Books through Stamps”と題して応募し、現在取り組んでいる蔵書印整理の取り組みを報告したのである。12月16日に行われた30th Anniversary Reception (オンライン)で結果発表があり、本プロジェクトはHonorable Mentionを受賞することができた⁶⁾。

そして、「はじめに」でも触れた通り、2022年1月10日にオンラインの公開ワークショップ「写本の山は招くよ」を開催した。プログラムは下記の通りである。

第1部 活動報告

- ①勝又基 (明星大学)「旧三井文庫調査における3つの工夫と今後」
- ②松本智子 (明治学院歴史資料館特任研究員)「難読蔵書印の解説について」

第2部 旧三井文庫からの資料報告

- ①亀井森 (鹿児島大学)「境界との接触—最後の琉球使節—」
- ②勝又基 (明星大学)「皆川良礎とは誰か」

以下、その各発表について紹介する。

5. 勝又報告「旧三井文庫調査における3つの工夫と今後」

報告では、まず本稿でここまで述べてきたようなプロジェクトの概要について説明した。加えてその一環として、オンラインデータベース (以下「本DB」)の実演を見せて見せた。これは暫定的に勝又のPCのハードディスクをサーバー代わりにして稼働させている試作品である。これを動かして見せ、そこに施した3つの工夫を説明することを通じて、本プロジェクトの目指すところを示そうとした。

工夫その1：検索と通覧の両立

本DBを作る上でまず心がけたのは、冊子体の目録を通覧するように利用できることである。本プロジェクトには冊子体の目録を刊行する予定はなく、オンラインDBを作成する方向で進めている。

利点の多いオンラインDBだが、マイナス面もある。とくに深刻だと個人的に考えるのが、検索偏重で「通覧」の機会が減少したことである。目録を冒頭から通読したり、本棚をぼんやりと眺めながら歩いたりする過程で「こんな本があるのか!」という気づきを得る機会が大きく減少してしまったのである。本DBがこの弊を助長することは避けたく、通覧できる機能を模索した。

その結果、日本古典籍の目録作成の標準的フォーマットである『内閣文庫国書分類目録』の部立てを利用することにした。全タイトルに「01 総記、02 神祇、03 仏教、04 言語、05 文学…」という大分類と、小分類 (文学で言えば国文、漢文、和歌、連歌、俳諧…)を施したのである。そしてこの分類を画面左にリスト化した。これをクリックすることで、ジャン

ルに属するタイトルがすべて現れ、通覧できるという訳である。

工夫その2：写本の特性に配慮

次に心がけたのは、写本の特性に配慮する、ということである。写本と一口に言っても、性質はさまざまである。特に江戸期写本の場合は、版本との関わりという新たな要素が加わり、ことは一層複雑になる。本プロジェクトでは、この点に配慮した目録作りを心がけている。①成立年次と書写年次との峻別、②写本のステイタスの判別、の2点に配慮したのである。

① [成立年次と書写年次との峻別] たとえば『三長記』は、原本成立年次は鎌倉時代の建久6年(1195)とされている。しかし旧三井文庫に蔵される一本(整理番号59)は、識語に享保7年(1722)写とあるので、江戸時代中期に書写された本であると分かる。もちろん、この本のように書写年次が明記されている場合は、他のDBでもそのことを記すだろう。しかし本DBの特長は、書写年次が明記されていない場合でも、書物の様子から判断して「近世中期」などと記したことである。

② [写本のステイタス] 写本と一口に言っても、自筆本と版本の写しとは、全く性質を異にする。本DBでは、自筆本、原本、転写本、版本写、版下本、草稿本などといった分類(これを仮に写本のステイタスと称した)を判別し、全てのタイトルに施したのである。

上記の2つの情報によって、それぞれのタイトルについて、より実態に即した理解が可能になる。また、旧三井文庫の写本の山から原本だけをリストアップする、というような凝った検索も可能になる。

ただ容易に想像できる通り、書写年次や写本のステイタスの判別は容易ではない。一つ一つを実際に手に取って精細に調査することが必要である。また手に取ったとしても、経験と知識がなければ判別は不可能である。本プロジェクトが苦勞して費用を捻出してまで大勢の優秀な共同研究者を米国まで連れて行ったのは、ひとえにこのため、と言っても過言では無いのである。

工夫その3：世界の誰でもが活用できる

昭和の末期から海外所蔵の日本古典籍に関する基礎調査は行われて来た。ただ当時の調査は、現地での利用ということが十分に想定されていなかったきらいがある。当時は日本に紹介することこそが成果であったのだろう。しかし時代は変わって、海外の研究者の間でもくずし字リテラシーは十分に普及している。海外に存する文庫・データベースで、現地の利用者を意識しないということは、今や許されない。

そのように考えて、本DBでは英語対応について力を注いできた。今のところ、書名、別書名、著者、書写者や旧蔵者などの関連人物について、ローマ字表記を付している。ローマ字の表記法については、北米の図書館に指針がある⁷⁾ので、それに従っている。

ただ、いまだ不十分な面も多い。とくに必要を感じているのは書誌学用語についてである。日本古典書誌学用語の英訳については、鈴木淳・Ellis Tinios『Understanding Japanese Woodblock-printed Illustrated Books』⁸⁾が先鞭をつけておられ、有用である。ただこれは版本に関する用語が主であって、写本の書誌学用語については、いまだ検討の余地がありそう

だ。とくに本 DB の要点である「写本のステイタス」については、用語の吟味から始める必要がある。

6. 松本氏報告「難読蔵書印の解説について」

他の文庫も大方そうであるように、旧三井文庫は、いくつかのコレクションから成る複合体である。土肥慶藏収集の鶯軒文庫、本居大平家旧蔵の本居文庫、三井高堅（宗辰）収集の宗辰文庫など、いくつかの文庫がその内部に一群を形成している。「本の履歴書」と言われる蔵書印の整理は、当文庫の形成過程を知る上で重要な作業である。松本氏は本プロジェクトの蔵書印整理事業において中心的な役割を果たしている。

氏はまず、蔵書印データの整理をどのように工夫して行っているかについて、事例に則して具体的に示してくれた。第1に、国文学研究資料館の蔵書印データベース⁹⁾の蔵書印IDを活用することによって一般化している。そして第2に、オンラインストレージ（One drive）やビジネスチャットツール（Slack）を活用することによって、データの共有や意見交換などの作業がオンライン上で円滑に進められているという。

研究代表者の立場からしても、作業のオンライン化はメリットが多い。昨今とくに実感しているのは、人材確保の面でのメリットである。蔵書印整理は高度な作業であるため、大学院生レベルでないと務まらない。それだけのメンバーを一定数確保して、東京郊外の大学まで定期的に足を運んでいただくことは困難である。その点オンラインであれば地域を問わないので、人材確保が格段に容易になる。じっさい現在の蔵書印整理事業は、神奈川県から2名、福岡県から2名が同時刻にオンライン上に集合して行っている。

また、質疑応答の時間を借りて、これまでの作業において読みが確定しなかった蔵書印120点をリストアップし、参加者に助力を乞うた。これには多くの読み案が提案され、調査に大きな進展がもたらされた。

7. 亀井氏報告「境界との接触—最後の琉球使節—」

第2部は、「旧三井文庫からの資料報告」と題して、旧三井文庫の資料を用いた、江戸の写本文化に関する研究発表を行った。本プロジェクトのゴールは、江戸の写本文化を見直すことである。データベースの整備は、多くの人に考えるための材料を提供することを目的としている。まずは我々研究グループが率先して活用し、議論を切り拓いて行こう、という訳である。

一人目の発表者である亀井森氏は、堀野義礼（ほりのよしのり）著の『琉球雑話』（整理番号1735）を取り上げた。嘉永3年（1850）自序、自筆本と思われる琉球もの写本である。亀井氏は作者の素性や学問的な背景を調査し、内容に他書からの引用も少なくないと断った上で、「琉球ものの写本の意義とは」、と問いかけた。琉球本の歴史を通覧すると、天保3年（1832）の琉球使節来朝に誘発されて、さまざまな琉球もの刊本が出たという事実がある。その蓄積を踏まえて、嘉永3年自序の『琉球雑話』は成った。彼はどのような興味から琉球を見て、一書に仕上げたのか。その答えについては亀井氏の来たるべき決定稿に譲って今は

差し控えるが、書物の境界、文化の境界に触れる議論だったと言えるだろう。

8. 勝又報告「皆川良礎とは何者か」

筆者もこの機を捉えて、調査中に気になっていた書物群について調べ、報告することにした。旧三井文庫を調査していると、鶺軒旧蔵の俳書の中に「皆川」と彫られた特徴的な蔵書印を持つ本が散見される。この蔵書主について、まず日本で知られていることを整理し、その上で、旧三井文庫を用いて加えうる新知見は何か、ということを明らかにしようとしたのである。

「皆川」印主は、寛政～天保期に活動した俳人・皆川良礎である。別号沢庵、蔵充閣。本業は福井藩府中領主・本多家に仕える医師であった。俳諧の面では、美濃派の再和坊系が主流であった府中（現福井県越前市）において、対立する以哉坊系の俳人として立機した最初と位置づけられていることが分かった。府中は鶺軒文庫主の土肥慶蔵の出身地でもあり、先祖の家系にあたるようだ（『鶺軒游戲』¹⁰⁾）。また、慶蔵の妻が三井家財閥の出身だったことから没後に三井文庫へ収められたとのことである¹¹⁾。

この一方で、良礎の俳諧については、知られている一次資料が極端に少ないということも分かった。著書として知られているものは無い。唯一知られている連句が、福井藩士の俳人・蝸牛庵葵由が良礎宅を訪れた際に巻いたもの（葵由編『月の笠』〈写本〉掲載）である¹²⁾。また良礎の一門では『南越』と題する歳旦帳が毎年刊行されたようだが、文政13年（1830）のものしか現物が確認されていない、ということも分かった¹³⁾。あとは他人の編んだ俳書に掲載された発句が確認できる程度である。

こうした先行研究を踏まえて UC バークレー校旧三井文庫から加えられるものは何か。これまで確認した限りで、皆川家旧蔵写本は20点を越える。その中には月次（つきなみ）懐紙や他人に批点を乞うた本人の句集、地方の俳人の訪問を受けた際の連句記録など、生々しい資料が残されている。また蔵書も、『おくのほそ道』（整理番号2792）といった俳書だけでなく、実録体小説『楠五代記』（同1449）、文法書『同文通考』（同505）などがあって、読書の幅広さを窺い知ることが出来る。これらを精査すれば、近世後期越前の俳諧史研究は大きく進展しうるだろう。府中というピンスポットの俳諧史、越前における美濃派以哉坊系俳諧の台頭、武士（医師）俳人の系譜、という問題を明らかにする大きな助けになりそうである。ただ先にも述べた通り、写真撮影は要所だけに留めたため、まだ資料全体に目を通せていない。今後の追跡調査を約束して報告を終えた。

9. プロジェクトのこれから

以上、「写本文化としての日本近世」プロジェクトの7年間の歩みと、去る1月に開催した公開ワークショップについて記してきた。これを踏まえて今後の課題について書き留めておく。

第1には、国内における追跡調査が必要である。写本のステイタス等をより正確に把握するためには、UC バークレー校に存する一点のみを見るだけでは足りない。時には国内に蔵

される同タイトルの諸本を確認する必要もある。また、現三井文庫や別機関に収められている旧三井文庫旧蔵書にも目配りをするので、UCバークレー旧三井文庫の調査も、より正確さを増すことになるだろう。

第2には、公開環境の整備が必要である。C.V. スター東アジア図書館との話し合いを踏まえて、データベースは明星大学のサーバーに置く方向で検討しており、学内での使用許可も得ている。残る問題は構築費である。現科研の費用は使い切っているのだから、達成のためには次の資金獲得が必要である。

第3には、重ねての現地調査が必要である。これまでの調査は限られた時間で全点を確認することを優先させたものであった。そのため、帰国して見返してみると、写真の撮り忘れやピンボケもあるし、データの採り忘れもある。国内での調査の進展によって重要性がわかり、もう一度手に取って確認したくなった本も多数ある。DBを正確なものにするためには、やはりどうしても再訪が必要である。ただこのためには、次の資金獲得のみならず、コロナの収束も必要である。現況を考えれば、少し長い目で見る必要があるかもしれない。

第4には、蔵書印データを一層整備したい。目下オンライン作業中であるが、現時点でまだ完了していない。まずは一通りの作業を終わらせることが急務である。いまだ難読印も多いので、今後は専門家の知見に頼ることも必要になってくるだろう。

第5に、これは先の話であるが、旧三井文庫の版本の再整理も視野に入れておきたい。先に挙げた版本目録『加州大学バークレー校所蔵三井文庫旧蔵 江戸版本書目』には、蔵書印データが記されていないが、写本の蔵書印データを整理した上で版本の蔵書印も整理できれば、見えてくるものは少なくないはずである。例を挙げれば、越前府中の俳人・皆川良礎の歳旦帳は、国内では文政13年のものしか確認されていないと先に書いた。しかし旧三井文庫の版本には、『南越』（請求記号2111）と題した歳旦帳が蔵されており、文政11・12・14、天保4、弘化3、安政4、万延2年が合本されているという¹⁾。これが皆川良礎本であることは間違いなさだろう。他にも版本の中には良礎本があるに違いない。蔵書印は写本と版本との仲立ちとなって、より豊かな書物の世界を見せてくれるはずである。

そして第6に、これが最終的な目標でもあるのだが、このデータベースを通じて、多くの研究を誘発したい。AJLS学会やワークショップで佐々木氏、亀井氏、そして筆者が示した通り、旧三井文庫はまだ多くの発見や気づきを得られるポテンシャルを有している。使いやすく、掘り下げやすいDBを提供することによって、多くの人がこのコレクションに興味を持ち、さまざまな立場から様々な興味に基づいて調べるようになって欲しい。ワークショップのタイトル「写本の山は招くよ」というタイトルは、こうした思いを込めたものである。

付記：本稿は、科学研究費「写本文化としての日本近世—国際貢献できるUCバークレー校蔵写本目録作成を通じて」（2017-2021 基盤研究（B）海外学術。課題番号17H04520）の成果の一部である。

註

1) 『調査研究報告』5、1984年。pp.(1)-(80)。

- 2) 1987年1月、古典文庫。
- 3) 1991年1～6月、岩波文庫。
- 4) マルラ俊江「太平洋を渡った日本古典籍 カリフォルニア大学バークレー校C.V.スター東アジア図書館コレクション」(『書物学』第18号、2020年7月、勉誠出版、pp.36-43)。この箇所他、旧三井文庫の概要については多くを同稿によった。
- 5) 2011年10月、岩波書店。第2章「和本には身分がある」。pp.73-120。
- 6) NCC JAPAN ホームページ (<https://guides.nccjapan.org/cddp/award-program>)。2022年2月4日確認。
- 7) The ALA-LC Romanization Tables: Transliteration Schemes for Non-Roman Scripts (<https://www.loc.gov/catdir/cpsd/roman.html>) 2022年1月20日確認。
- 8) Brill, 2013。
- 9) https://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/
- 10) 昭和2年6月、改造社。「我が実家」五「皆川沢庵の事」pp.263～266。ただしこの節に記されるのは良礎の先代のことである。
- 11) 東京大学附属図書館 HP「鶯軒文庫について」(https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/josetsu/2004_03/bunko.html) 2020年1月16日確認。
- 12) 齋藤耕子『福井県古俳書大観』第4巻(2003年6月、福井県俳句史研究会)に翻刻・解題が載る(pp.356-370、底本・天理図書館本)。ただし解題に「文政十年(1827)刊」とするが、版本の写しだとは考えがたい。
- 13) 齋藤耕子『福井県古俳書大観』第3巻(1991年6月、福井県俳句史研究会、pp.400-406)に翻刻・解題が載る。
- 14) 岡雅彦『加州大学バークレー校所蔵三井文庫旧蔵 江戸版本書目』(既出)。p197。